

Zawawi Ibrahim,

*The Malay Labourer: By  
the Window of Capitalism.*

Singapore: Institute of South East Asian  
Studies, 1998, xv + 347 pp.

よし むら ま こ  
吉 村 真 子

はじめに

マレーシアは英領植民地時代に錫とゴムの世界的な産出地となり、労働者として錫鉱山に中国人が、またゴム・プランテーション（大規模経営の農園。以下、農園）にインド人が導入された。その二大産業や商業の発展がマレー半島の西海岸を中心に進んできたのに対して、マレー人は零細規模の稲作小農やゴム小農として農村に留まった。この構造は、独立後のマレーシア経済における種族間所得格差や、西海岸と東海岸の開発格差の背景ともなった。

従来、マレーシアの賃労働者に関する議論は、植民地時代ならば錫鉱山の中国人労働者やゴム農園のインド人労働者、そして1970年代以降は、急速に近代部門に参入してきたマレー系労働者、とくに電子産業などに大量に雇用されるようになったマレー系女性工場労働者が対象となることが多かった。実際には、農園などで働くマレー系労働者もいたのだが、議論の対象となることは少なかった。

本書は、マレーシアのトレンガヌ州クママン (Kemaman) 地域の内陸部に位置する油ヤシ (オイル・パーム) の農園のフィールド調査 (1972~75年) をもとにして、マレー系労働者のプロレタリア化の背景や意識、農園における生活や仕事、ストライキや組合運動について論じている。東海岸のトレンガヌ州はマレー系 (住民) が多く、イスラム的伝統も強い地域である。本研究では、単に賃労働者の形成とその組織化の過程をなぞるのではなく、マレー系の

エスニシティ (宗教、文化も含めて) やアイデンティティ、人間関係もその議論の対象に含んでいる。

本書の著者ワン・ザワウィ・イブラヒムは、オーストラリアのモナシュ大学で社会人類学の博士号を取得し、現在、サラワク・マレーシア大学 (UNIMAS) の社会学の教授として、アプライド・アンド・クリエイティブ・アート学部の学部長を務めている。彼は、農村社会や労働、先住民、ポップカルチャーなどを研究対象として、社会人類学の視点からアプローチしている。またシンガーソングライターとして先住民について歌ったCDも出しており、本書の文章や章タイトルの文学的な表現はいかにも彼らしいものである。

本書は1978年にモナシュ大学に提出した学位論文をもとにしており、本論では72~75年のフィールド調査を中心に議論しているため、序文と結論は調査対象地域の90年代以降の状況をふまえて著者の考察を書き足した形になっている。

本書の章別構成は、次のとおりである。

序文

- 第1章 トレンガヌの植民地後の州 (開発と不平等の再編成)
- 第2章 カンボン (村) から農園へ (マレー人のプロレタリア化の政治経済)
- 第3章 農園における階級とエスニシティ (初期の曖昧性)
- 第4章 フロンティアから政治共同体へ (1967~72年の経営, 労働条件, そして社会組織)
- 第5章 働く場における資本との対決 (マレー人のプロレタリア意識のエスノグラフィと詩論)
- 第6章 コンシ構内に住んで (マレー・プロレタリアのサブ・カルチャーの出現)
- 第7章 初期のストライキとレジスタンス (「階級」と「非階級」の接合)
- 第8章 組合主義とマレー労働者たち (1973~75年の新しい指導者たち, 再統合, そしてイデオロギー)

結論

以下、第I節で本書の要約を示し、第II節で評者のコメントをまとめて述べることにする。

## I 本書の要約

序文では、「資本主義の窓のそばにて」として、本書の目的と視点、さらには本論の議論以降の調査対象地域の状況について述べている。そして本論では、1960年代半ばから70年代半ばの10年間における「フロンティア資本主義」の局面からトレンガヌ州における農園社会の発展、とくにマレー小農のプロレタリア化と農園社会におけるエスニシティと階級、労働者階級としての意識形成、ストライキや組合運動などについて、「歴史研究としてのエスノグラフィー」と位置づけて論じると主張する。

第1章では、トレンガヌ州の低開発と独立後の開発戦略を示し、本論の調査対象であるクママン農園が1965年にトレンガヌの農園開発の「州（州開発公社）と民間資本のジョイント・ベンチャーの先駆け」として始められ、地元の人々（民衆）には雇用創出（72年段階で3000～3500人）の恩恵はあったものの、利益を受けたのは他州（もしくは外国）の企業（おもに華人系）であり、マレー系の政治権力と華人の買弁資本が相互依存して経済権益を分け合う構造になっていることを指摘する。

第2章では、マレー小農が農園の賃労働者となるプロレタリア化の過程を、社会的な出身・背景や土地所有から論じ、土地へのアクセスもなく、家の農作業への義務もない者が「自由な労働者」として、農園で働くようになったことが示される（またゴム価格の下落で労働者になったゴム小農もいたことも指摘される）。

第3章では、農園における階級とエスニシティについて論じられる。農園内の階層は階級・地位によるヒエラルキーがあるが、同農園の場合は“orang pegawai”（英語の直訳で“official people”）と労働者の関係が上下関係として示される。また労働者間でも直接雇用と間接雇用（下請けの請負労働）の別があり、収入格差も生じている。そしてエスニシティと階級の構造として、スタッフは華人が6割強、

労働者はマレー系がその多くを占めることが示される。

第4章は、農園が開かれた当初（1967～72年）の経営側や労働条件、そして社会組織が説明される。そもそも宗教の場である“surau”（イスラム教の祈祷所）が集会場として使われたものの、政治的な場としてそぐわず、与党政党である統一マレー人国民組織（UMNO）の支部が設立され、それでもなお労働者の要求を訴え、問題を解決する組織として、全国農園労働者組合（NUPW）の支援を受けて労働組合が結成される過程や、経営側の反応が示される。

第5章では、マレー系労働者の階級関係や資本主義的体験や資本との対決が分析対象となっている。そして「“new-style”の農園」とプロレタリアのモラル・エコノミー、生存維持と相互依存のプロレタリアの権利、地位による搾取が対象とされる。とくにここでは搾取と“timbang rasa”（直訳で「気持ちをしる」）について、労働者と現場監督との関係など具体的なケースを扱って論じている。

第6章では、労働者の“kongsi”（「小屋」の意。以下、コンシ）の生活について記述される。同農園の住宅の状況や生活の基本となる世帯のさまざまなあり方や敷地内の社会関係、下層階級としての平等主義と連帯、またマレー・プロレタリアのサブ・カルチャーについて論じられる。スタッフ向けの宿舎に比べて、そもそも一時的な住宅であるべきコンシの劣悪な住宅事情が具体的に示される。こうしたコンシの生活は、物理的条件も含めて労働者の社会関係を規定し、また独特のサブ・カルチャーとも言うべきものも生み出す。

第7章では、初期のストライキとレジスタンスの分析を対象として、さまざまなストライキのケースが紹介される。そして具体的なケースの記述とともに、農園の生産関係においてマレー労働者が労働力を売る労働者階級として、人間として、マレー系というエスニシティとして、ストライキを体験する様子が描かれる。

第8章では、1973年から75年にかけての労働組合とマレー労働者について、農園内のUMNO支部やNUPWといった組織相互もしくは指導者のコンフ

リクト、労働者の連帯やイデオロギーが論じられる。そしてNUPWの指導者のスピーチなどから、そのイデオロギーの言説が分析される。

そして最後に結論では、1970年代以降の工業化に見られるプロレタリア化に比べて、農園では、その農園社会そのものが階級社会であり、(工場労働者の仕事と生活がより自律的であるのに比して)コンシに暮らすことは社会的、政治的、空間的にも階級的な生活におかれること、またエスニシティと階級は相互に切り離せないものであることが示される。

そしてマレー労働者の階級としての日々の抵抗は、個人として、人間としての絶え間ない闘争と切り離すことはできない。政治的であると同時に「文化的な闘争」(Escobar)なのであり、また「日々の人間的な闘いと抵抗」(J. C. Scott)から組織化された集団行動や社会運動にかわるにしても、労働者コミュニティ外部の諸制度と政治的關係との相互作用を考慮する必要があることが指摘される。

## II コメント

本書の評価すべき最大の点は、(著者が序文で強調しているように)1970年代初めの農園社会におけるマレー系労働者のエスノグラフィーとして貴重であることだ。

農園に労働者として入ってくるマレー小農がどういった背景をもって来たのか、そして農園でのヒエラルキーが仕事や暮らしにおける人間関係や空間にどういう意味をもってくるのか、そして彼らがどのように労働者階級としての意識をもち、運動を組織していくのか、そうしたことが実に生き生きと具体的に語られる。まさに著者が見て記録した出来事や人々の言葉を、読み手はそのままに体験できる。

ただ、これは同時に本書に対する評価が分かれる点ともなろう。すなわち、言説の分析に重きをおいている面もあるために、会話や演説はそのまま再現して載せられており、また労働者の生活や労働組合の組織化にいたる経緯の形成の記述なども詳細であるために、それが冗長という印象を与えかねない。そうした部分は付随資料や注にした方が本文の議論

がより明確になったかもしれない。しかしながら、読み手がそれぞれの視点でアプローチする材料が豊富に提供されているととらえることもでき、むしろそうした部分を楽しみながら読んだ方がいいだろう。

また第7章と第8章の労働者のストライキと労働組合の組織化の過程では、マレーシアのマレー系労働者のエスニシティ(ムスリムである面も含めて)や政治団体との関係(たとえばUMNO)も詳細に描かれており、リーダーシップの形成も含めて具体的にイメージできる。とくに第8章の労働組合関係者のスピーチは面白い。労働組合とその活動によって物質面の生活向上が獲得されたことが強調され、明るい未来のために労働者の連帯と協調が訴えられる。また労働組合の闘争がナショナリズム独立運動に貢献し、共産主義を放逐し、民主主義的かつ独立した国家における市民として、また労働者として当然の権利の行使であるとその正統性が語られる。こうした正統性の強調は、マレーシアの政治的状況やマレーシアにおける労働組合の位置づけをも反映しており、非常に興味深い。

なお本論で出てくるマレーシア(ムラユ)語の語句は巻末にまとめて挙げてあり、マレーシア語になじみのない読者にとって便利であり、さらに本書のマレー文化やエスニシティについての議論でおもなキーワードとなりそうな語句には、著者なりに説明を付けていて、わかりやすい。

第3章で出てくる“pegawai”は一見わかりにくいですが、Chart 3(p. 50)のように労働者に直接指示を出すスーパーヴァイザー(旧英系農園ではコンダクター)以上の職階の(トップのジェネラル・マネージャーまでも含める)「スタッフ」を示すと理解すればいいだろう。

また、農園における労働者の上司(スタッフ)などとの人間関係で、第5章以降に繰り返し“timbang rasa”がキーワードとして示されるが、具体的な仕事場でのやりとりや説明を読むと、日本人には「気配り」や「思いやり」としてなじみやすい。とすれば、これは一般的もしくはアジア的な共通性があるのか、それともマレーシア的あるいはマレー独自のものなのか、といった検討も本論の中でほしかった。

それから本書の構成については、1970年代に行ったフィールド調査をもとに分析した本論（第1章から第8章）の補足も兼ねて、序文と結論で現在の状況も含めて議論を提起しているが、97/98年に書いた序文と結論が70年代に書いた本論と別個の印象を与えるものになっているのは、読み手にとって少々読みにくい。やはり1980年代、90年代の状況は別個に1章を設けた方が適切だろう。また序文で、本論の議論の枠組みが明示されていないので、各章の位置づけが示されれば、より読みやすかっただろう。

本書についての疑問点を指摘しておきたい。

第1に、「賃労働者」や「プロレタリア化」が議論の中心であるが、19世紀後半の錫鉱山の中国人労働者、20世紀初頭のゴム農園のインド人労働者との比較や位置づけ、もしくは1970年代以降のマレー系の工業部門におけるプロレタリア化との比較がないので、全体の位置づけが見えづらい。

たとえば第2章で「自由労働」(free labour) という概念を議論の前面に押し出すならば、「生産手段からの自由」(土地所有の有無)のみならず、「自らの労働力を売る自由」すなわち「身体的自由」についても検討した方がいい。それは議論するまでもない前提(かろうじて言及はしているが)としているために、それ以前の「賃労働者」(植民地時代のインド人契約労働者や錫鉱山の中国人クーリーなど)の状況との比較をする好機を逃している<sup>(注1)</sup>。

また「プロレタリア化」の前提と背景についても、土地所有および土地へのアクセスのみを強調するのは、あまりにもシンプルである。

著者は、第2章でマレー労働者のプロレタリア化の背景として、彼らの土地へのアクセスの有無とその土地への精神的拘束を分析する。もちろん土地へのアクセスの有無だけで農園労働者になるわけではないことは著者も幾度も繰り返しているが、その他の要因をも含めて議論する中でマレーシアの1970年代が位置づけられれば、この章において大きな問題提起ができたはずである。

第2に、「階級」と「エスニシティ」の議論についても、付け加えうる論点がいくつか指摘できる。

まず、第3章のように農園の階級とエスニシティ

について論じる際に、単に1970年代時点における一農園でそのヒエラルキーを見るのではなく、歴史的に位置づければ、植民地時代におけるインド人労働者(イギリス資本対インド人労働者)について、また70年代以降の政府による農園企業の買収などの「マレーシア化」によって起こっている変化(スタッフ・レヴェルのマレー化など)、もしくは80・90年代以降の外国人労働者についても視野に入れば、さらに多くのことが議論できたはずである<sup>(注2)</sup>。

またエスニシティの問題として、本書では「マレー系」に注目して、そのプロレタリア化を取り上げていながら、通史的に見ていないために抜けている点もある。すなわち、(インド人労働者の数よりは少ないまでも)そもそも植民地時代にゴム農園で働いているマレー人はすでに相当数いた。そうした史実を指摘せずに、マレー人が小農に集中していた東海岸を示して、マレーのプロレタリア化が語られる。

そして第2章でプロレタリア化の背景として、土地へのアクセスを中心に議論を進めるのならば、FELDA計画を(ムダ灌漑計画に比べて)「国家による地主・小作関係の一変型」と位置づけるだけでなく、賃労働と並行してFELDA計画による自作農創出が(しかも新経済政策によるマレー系優先政策のもとで)同じマレー系に対して起こっていることの意味を議論することもできるはずである。

なお「階級」について論じる際に、マルクスの資本・労働関係の「階級」と社会「階層」さらには農園内の「職階」の3つがときとしていっしょに論じられていることも指摘できる。

第3に、第5章の“old-style”農園と“new-style”農園の概念については適用がふさわしいかどうかかわからない。原典に当たっていないので、カリブ諸国を扱っているらしきエリック・ウォルフ(Eric Wolf)の議論については云々できないが、どこの地域のケースにしる、“old-style”農園には個人的かつ人間的な関係があり、“new-style”農園にはないという類型化は、植民地でもおに宗主国の資本で形成された農園の歴史を考えるにはイメージできず、むしろ農園は本来的に階級社会であり職階によるヒエラルキーが歴然としていることの方が前提となるはずで、

(近代的な会社組織の農園の方が人間関係がビジネスライクということなのかもしれないが)“new”という前提がよくわからない。

最後に、労働運動や労働組合運動について議論をしながら、その歴史的な背景やマレーシア全体の組織的な説明といった全体の概観がないので、あった方が読み手には親切かもしれない<sup>(注3)</sup>。

こうした本書の弱点は、第1に議論の枠組みとそのため概念の適用があまいこと、また第2に議論と分析にあたり、一農園のみに視点を置き(マレーシアの賃労働者もしくは労働運動について)歴史的・総体的に位置づける部分が弱いことから生じている。

本書の全体についての議論の枠組みは、スコット(J. C. Scott)の「日々の抵抗」を念頭においているようだが、賃金労働者(プロレタリア)や自由労働、生産様式など基本的な概念は、依拠している文献(従属論の論者も含めて)の議論も含めて、あくまで古典的なマルクスの概念を適用している。マルクスの『資本論』などの原典からは引用していないが、著者の概念の適用はあくまでオーソドックスである。そのため、マルクスの概念とのずれが気にかかる箇所がでてくるのである<sup>(注4)</sup>。またスコットの「日々の抵抗」にしても「モラル・エコノミー」にしても植民地化の過程や小農社会を対象として提起されたものであり、農園やその労働運動に対して単純に適応できるものでもなく、イメージとしてもずれが出てきているのかもしれない。

また第2の点は、1990年代末の時点で70年代の研究を出すことの意味について、著者自身が歴史研究としてのエスノグラフィーとしたいと述べているだけに、90年代から見て新たな視点と位置づけの提起ができたのではないかと惜まれる。

古典的に解釈するならば、自由な賃労働者への転化は、「生産手段の一部分である(身体の自由のない)奴隷や農奴」からならば解放であるし、「生産手段を持つ自営農民」からならば転落である(本源的蓄積期による抵抗運動は後者によって担われる)。しかしマレーシアの1970年代以降の経済発展において、若者は次第に「給料をもらう会社勤め」という

生活スタイルを選好し始め、80年代後半からは職種の違いが激しくなってくる。1970年代に農園勤めが選好されても、80年代にはもはや農園は3K職場として忌避され、外国人労働者が導入される<sup>(注5)</sup>。そうした1980年代以降の動きを著者自身、序文で指摘しているが、60年代末から70年代初めに農園労働を選択することの意味を90年代末から振り返ると、70年代においてすでに「生産手段へのアクセス」がありながらも賃労働を選好する層がいた可能性が見えてくるのではないだろうか。

本書は、農園の労働者の生活や人間関係、ストライキや組合運動の組織化に関する分析として、さまざまな面を垣間見せながら、生き活きとした語り口で、読者に東海岸のマレー農園労働者に対面する機会を与えてくれる。そして、それを可能にしてくれるのは、本書全体に感じられる著者の農園労働者に対する愛情と友情なのである。

(注1) たとえばロバート・マイルズ(Robert Miles)の「不自由な賃労働」(unfree wage labour)といった1980年代以降の議論を適用すれば、より議論が深まるであろう。

(注2) 吉村真子『マレーシアの経済発展と労働力構造』法政大学出版局 1998年 189~190ページ。

(注3) マレーシアの農園労働組合については、Charles Gumba, *The National Union of Plantation Workers: The History of the Plantation Workers of Malaya 1946-58* (Singapore: Eastern University Press, 1962), もしくは Ramasamy, *Plantation Labour, Unions, Capital, and the State in Peninsular Malaysia* (Kuala Lumpur: Oxford University Press, 1994), また労働組合については Jomo and Patricia Todd, *Trade Unions and the State in Peninsular Malaysia* (Kuala Lumpur: Oxford University Press, 1994) を参照されたい。

(注4) マルクスによる「自由労働」の概念については、『資本論』第4章第3節および第24章第1節を参照されたい。

(注5) 吉村『マレーシアの……』の第5章「マレーシアのエステートと外国人労働者」。

(法政大学社会学部助教授)